

◆◆館蔵品紹介◆◆

伝周文筆／天隠龍沢賛「真山水図」

文明12年(1480) 紙本墨画淡彩
高89.6×横33.5(cm)

本作は、縦長の画面下部に絵が描かれ、上部にそれに関連した漢詩文が記された、室町時代に流行した典型的な詩画軸の形式である。絵は室町時代を代表する画僧・周文(生没年不詳)の作と伝わる。賛は天隠龍沢(1422～1500)である。画面左端には高くそびえる山、大きな岩とその上に突き立つような樹木が描かれ、岩の間からは人が乗った舟が覗いている。画面右端には竹のような樹木が生えた土坡と誰もいない亭が描かれている。画面中央は背景にうっすらと山々を描きながらも、大きく余白をとってモチーフを対角線上に配置している。本作の外箱の木口に「周文筆 真山水図」という木口札がある。

周文は、画号を越溪、道号を天章とし、相国寺で如拙(生没年不詳)に絵を学んだとされている。室町幕府第6代将軍・足利義教(1394～1441)の御用絵師としても活躍した。周文の伝称作品は数多く残されているが、現存諸作品には款記がなく、印章があったとしても後に捺された可能性があるため、その確かな作品は1点も確認できていない。むしろ弟子である岳翁蔵丘(生没年不詳)、雪舟等楊(1420～1506頃)らの作品の方が残されており、これまでの研究では、弟子たちの作品から周文様式を探るといことが行われてきた。岳翁の画風はある程度変遷しているが、例えば、東京国立博物館の「山水図」(図1)の構図が本作に近いと考える。舟がちょうど亭の近くにつき、そこへ向かって石段を上っていく人物が描かれる点を除けば、全体的に余白を大きくとり、画面左側に真っ直ぐに高くそびえる山々と、その対角線上に位置する亭という構図が本作と類似する。また、伝周文「湛碧斎図」(香雪美術館蔵)(※)も同じようなモチーフ・構図で描かれていることから、本作の様式は確かに周文周辺で見られるものだと言える。ただ、筆致に関しては、岳翁の「山水図」、伝周文「湛碧斎図」と比べてみても共通点が多いとは言いがたく、本作はやはり「伝周文」に留まるべきであろう。





図1 岳翁藏丘「山水図」
室町時代、15世紀
東京国立博物館蔵
出典:ColBase (<https://colbase.nich.go.jp/>)

次に注目すべきは、画面上部の賛である(図2)。賛者の天隠龍沢は播磨国(現兵庫県)出身の臨濟宗一山派の禅僧で、別号は黙雲。建仁寺、南禅寺に歴住した。当時人気の文学僧ということもあり、彼の賛が記された作品はいくつか存在する。本作の賛の原文と読み下しを以下に載せる。

【原文】

吟扣船舷困臥篷
雖輕南去北來風
觸戈蛮甲戰圖外
天以江山付此翁
文明庚子春
黙雲龍澤
「龍澤」(朱文円印)
「天隠」(朱文方印)

【読み下し】

吟じて船べりを扣き困りて篷に臥す
軽しと雖ども南去北來の風
戈蛮甲に触れる戦圖外
天は江山を以て此翁に付す
文明庚子春
黙雲龍澤

この賛は、天隠の詩文集『黙雲藁』^{もくうんこう}にも掲載される、確かなものである。さらにもう一幅、重要文化財に指定されている岳翁の別の「山水図」(東京国立博物館蔵)がある。そこに記された天隠の賛(図3)と本作の賛(図2)を比較してみると、その筆致や朱文方印がほぼ一致することが分かった。このように、本作に記された天隠の賛は本物の可能性が高く、「文明庚子」、つまり文明12年を本作制作の下限とすることができる。周文の生没年ははっきりしないが、康正年間(1455～57)頃までには没したと考えられていることから、本作は周文活動時期よりかなり下がることになる。天隠のすべての賛に年代が記されているわけではないため、むしろその点で本作は貴重な作例と言えよう。文明12年の春は、天隠にとっては播磨の塩屋城主・赤松下

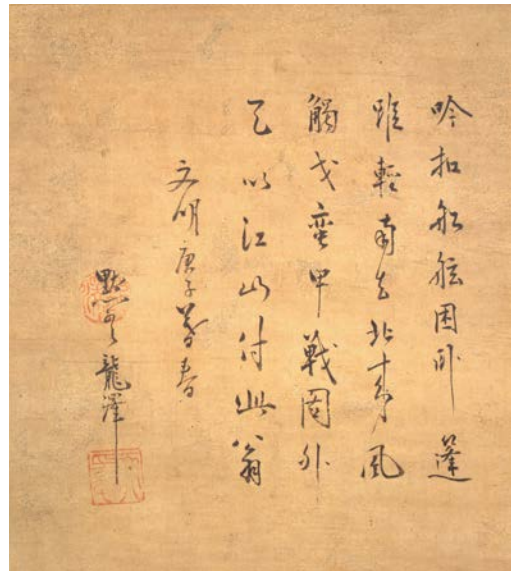


図2 伝周文筆/天隠龍沢賛「真山水図」
遠山記念館蔵 天隠龍沢賛部分

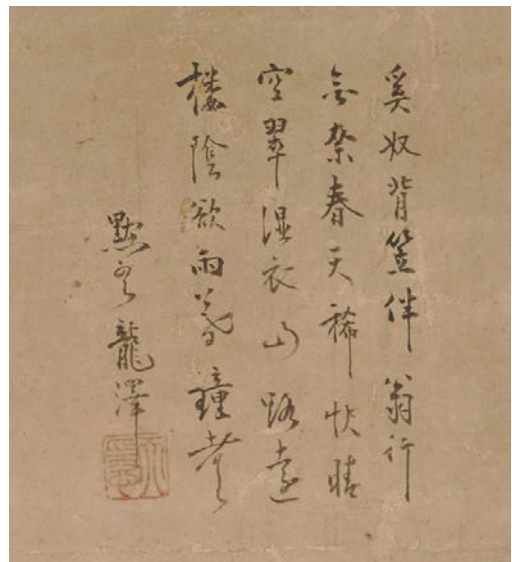


図3 岳翁藏丘筆/天隠龍沢賛「山水図」
室町時代、15世紀 重要文化財 東京国立博物館蔵
賛部分(トリミングは筆者による)
出典: ColBase (<https://colbase.nich.go.jp/>)

野守政秀に招かれ、^{ぎやくしゆ}逆修の法会を執り行った大事な年でもあった。本作の制作背景については今後も検討が必要であるが、15世紀後半における詩画軸の基準作の一つとして注目していただきたい。(柳澤恵理子)

主要参考文献

- ・城市真理子『室町水墨画と五山文学』(思文閣出版、2012年)
- ・展覧会図録『将軍家の襖絵』(山口県立美術館・根津美術館、2022年)
- ※「湛碧齋図」については文化遺産オンライン(<https://bunka.nii.ac.jp/heritages/detail/198740>)を参照されたい。

古田織部箱の「黒塗四方盆」について

依田 徹

遠山記念館で所蔵する「黒塗四方盆」は、当館の『遠山記念館所蔵品目録1』（1990）では、有賀家伝来とのみ紹介されている。しかし付属品は古河藩主土井家の伝来であることを示しており、内箱蓋表は古田織部（1543～1615）が徳川幕府の重臣であった土井利勝（1573～1644）に贈ったという体裁になっている。これまで盆そのものへの疑問点から、この来歴は公表してこなかった。しかし箱書きの文字が織部の書風と一致している点、そして書式が初発的な点から、注目すべき例と見られる。以下、この作品について紹介したい。

まず「黒塗四方盆」について確認したい。名物茶入などを飾る際に用いられる唐物盆を真似て作られた、日本製の盆である。本作は24cm四方の盆で、高さは3.9cmとなっている。斜めに立ち上がった縁の先端に段差をもうけており、その断面が矢筈形となる。この形は16世紀に京都で活動したと伝えられる伝説的な塗師、羽田五郎（生没年不詳）の創意と伝えられ、特に「羽田盆」と呼ばれている。羽田盆は「松屋肩衝」（根津美術館蔵）に付属するものが著名であるが、根津美術館のものは高台が裾広がり台形であるのに対し、本作は高台の下方にも面取りを施し、さらに複雑な外観となる。

蒔絵などによる加飾は持たないものの、黒漆がしっかりと塗り重ねられており、重厚感のある作りである。また「ヤケ」と呼ばれる漆の褪せ、「断紋」と呼ばれる表面のヒビといった、経年変化を感じさせる特徴が見られない。特に羽田五郎作と伝えられる漆器は薄手の塗りを特徴とされているが、本作は厚手の塗りであるため、本作を羽田の作風に当てることは難しい。

また本作は、売立ての札（図2）から有賀長文（1865～1938）の旧蔵品と特定できる。有賀家は、江戸時代の大坂において、国学・歌学の家として知られていた。長文は東京大学から農商務省に進んだ後、井上馨（世外）の推薦で三井財閥に入り、長年にわたって三井合名会社の理事を務めた。三井系財界人の多くがそうであるように、有賀も日本の古美術蒐集と茶道数寄の世界に入り、優れたコレクションを形成している。そして有賀は存命中の昭和10年（1935）10月28日に売立を行い、コレクションを処分する。この時は「佐竹本三十六歌仙絵 伊勢」



図1 「黒塗四方盆」 江戸時代初期 17世紀

が83,900円で落札されており、総売上は740,000円を超えた。先述の札はこの時のものであり、5,500円で落札されたことも確認できる。

本作において特筆すべきは、その箱である。二重箱となっており、内箱蓋表（図3）には「土大炊様／参／黒塗盆 古田織部」、内箱甲紙（図4）には「羽田盆 従古田織部到／来御名當有」と書かれている。「土大炊」は土井利勝、「名當」とは宛名の事である。すなわち土井家に伝わった品であり、家祖である利勝の名前が書かれている事を重要視した表現となっている。

さらに外箱蓋表（図5）には「御泊城御飾用／黒四方盆」、外箱蓋裏（図6）には「安永五年／天保十四年」とある。この「御泊城」とあるのは、徳川将軍が宿泊する際に泊まる名古屋城本丸御殿（愛知県名古屋市）が有名

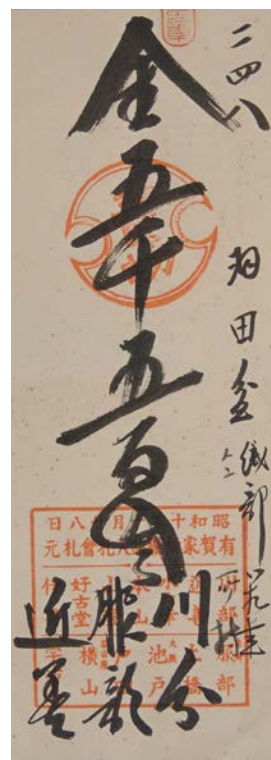


図2 売立ての札

であるが、むしろ江戸時代には日光東照宮への墓参りである「日光社参」での使用が多かった。この際に使われるのが岩槻城(埼玉県さいたま市)、古河城(茨城県古河市)、宇都宮城(栃木県宇都宮市)である。そして安永5年(1776)と天保14年(1843)は、それぞれ10代将軍の徳川家治、12代将軍の徳川家慶が日光社参を行った年にあたる。

特に古河城は、土井家にとって家祖である利勝が寛永10年(1633)に徳川家光から任された城である。その後、土井家は鳥羽藩、唐津藩に転封され、宝暦12年(1762)に土井利里としきよが古河藩に戻ったという経歴があった。安永5年の日光社参に際する将軍の宿泊は、土井家にとって大変晴れがましい事であり、家老であった鷹見泉石が諸手配に奔走した。その時に本作は、藩祖ゆかりの品として飾られたのだろう。

さらなる問題は、内箱の筆跡を織部のものとして認める

かどうかである。署名の筆跡は勢いも良く、織部の基準となる筆跡の一つ、「島津家文書」(東京大学史料編纂所、国宝)の島津義弘宛書状(図7)とも近似している(図8)。特に「土」と「大」の字に内箱に近い筆跡が認められ、真筆の可能性が高いと判断する。また宛名には「土大炊様」とあるが、土井利勝おおいのかみが大炊頭に任じられたのが、慶長10年(1605)の秀忠参内の時である。織部は慶長20年の大坂夏の陣に際して切腹しているので、この10年の間に織部から利勝に贈られたことになる。これに関して、『寛政重修諸家譜』の土井利勝の状には、次の記述がある。

(慶長15年)八月三日御使をうけたまはりて駿府にいたるところ、東照宮御前にめされ、紹鷗円座の茶入をたまはり、将軍家の左右につかふるうへは、諸大名と会合すべし、よりてこの茶入をたまふとなり。このとし老職となる。
(『寛政重修諸家譜』)



図3 内箱蓋表

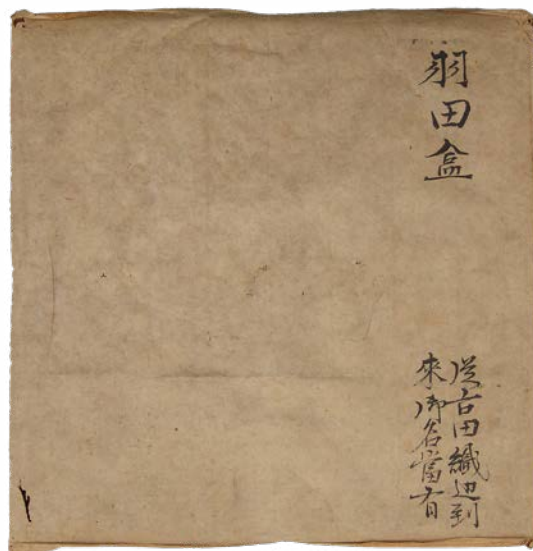


図4 内箱甲紙



図5 外箱蓋表



図6 外箱蓋裏

慶長15年、將軍徳川秀忠の側近となっていた利勝は、駿府城(静岡県静岡市)に隠居していた家康を訪れた。家康はこの時、將軍側近として諸大名と交流することがあるからと、利勝に大名物「紹鷗円座」を下賜したという内容である。

また同年に利勝は下総国佐倉城(千葉県佐倉市)を任され、領地の整備を進めていく。特に同19年に家康が房総巡見を行う際、家康が泊まるための宿所として「千葉御殿」と「東金御殿^{とおかね}」を造営しており、この両御殿のための調度品を増やす必要もあった。そしてこの頃の織部は、頻繁に京都伏見から関東に下向し、諸大名相手に茶の湯の指導をしている。本作は羽田五郎の古作というより、この時期の利勝が織部に相談し、新調された品と見るべきである。

特に重要なのは、内箱の書式である。現在茶道具の箱は通常、品名が右上に、作者名が左下に来る。しかし本作の箱は左上に宛名を記し、続いて品名と署名を記している。この宛名を左上、署名を左下に書くのは消息文の形式であり、箱書の形式が当初、消息を踏襲して発生した状況をうかがわせる。同様に織部の署名が左下に入る例が熊本藩家老松井家に伝わった「くろちゃわん」(図9)、柴田藩主溝口家に伝わった「織部沓」の箱(図10)にも見られ、いずれも織部が松井康之、溝口秀勝に贈ったという体裁になっている。特に松井家の「くろちゃわん」は現在の織部焼と分類されているものと作行が異なり、本来の織部好みを考える上で重要な作例である。対して溝口家のものは箱に「茶碗」等の品名が入っておらず、絵入りの「黒織部」が食器として創出された可能性も残る。さらに宛名は松井家のものが箱の中央、溝口家のものが右上となっており、織部の存命中に書式の試行錯誤が続けられていたのだろう。本作はむしろ、こうした茶道具の箱書の書式が成立する過程を示す実例として、高い価値を持っていると言える。

(当館学芸課長)

主要参考文献

高橋義雄編『大正名器鑑 第8編』大正名器鑑編纂所、1926

堀田正敦他『寛政重修諸家譜 第五 新訂』続群書類従完成会、1964

『日光社参と古河藩』古河歴史博物館、1994

宮下玄覇『古田織部の世界』宮帯出版社、2014

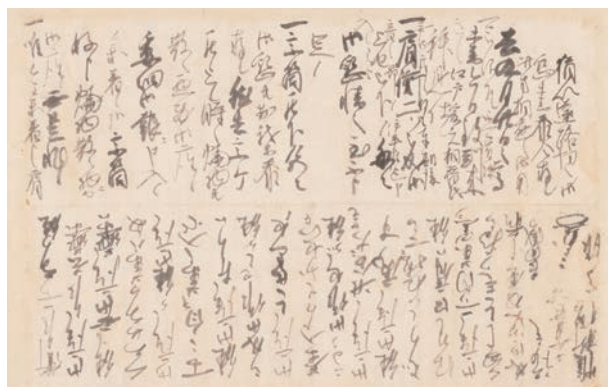


図7 古田織部消息(烏津家文書)東京大学史料編纂所



図8 古田織部の署名の比較(左:図3、右:図7)
※トリミングは筆者による



図9 松井家旧蔵「くろちゃわん」および蓋表
(『三楽庵所蔵品入札』より転載)



図10 溝口家旧蔵「織部沓」および蓋表
(『大正名器鑑』より転載)

テーマ展 「茶道具と床飾り」

3月28日(土)～5月10日(日)

室町時代、書院造りの成立とともに、足利将軍家周辺で床の間に掛軸や香炉を飾り付ける作法も定められていきました。さらに戦国時代に入ると、道具を飾り付けて客をもてなす茶の湯が流行し、千利休らによって道具も吟味されるようになります。遠山記念館を代表する茶道具が、豊臣秀頼と共に大坂城で被災し、徳川家康が修理して将軍家に伝来した「文琳茶入 銘 玉垣」です。また「青磁香炉 銘 浦千鳥」は、元は明智光秀が所持し、落城前の坂本城から持ち出されたとされるものです。さらに今回は、遠山記念館で所蔵する長次郎の黒楽茶碗「巖」と「大威徳」を並べて展示します。この他にも「寸松庵色紙」や「菊蒔絵硯箱」、「釣舟花生 銘 淀屋船」など、遠山記念館所蔵の名品を選んで展示いたします。



「文琳茶入 銘 玉垣」 中国 南宋～元時代 13～14 世紀



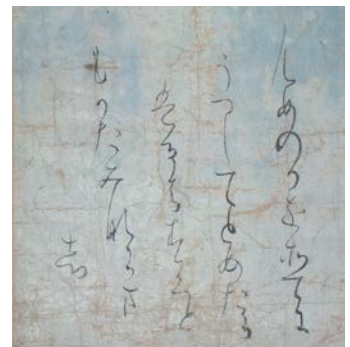
「青磁香炉 銘 浦千鳥」 龍泉窯(中国) 南宋時代 12～13世紀



長次郎「黒楽茶碗 銘 巖」
桃山時代 16世紀



長次郎「黒楽茶碗 銘 大威徳」
桃山時代 16世紀



「寸松庵色紙」平安時代 11世紀
重要文化財
(展示期間:4/22～5/10)

「茶道具と床飾り」 関連イベント

・土曜講座「遠山記念館の茶道具」

5月2日(土)

午後1:30～3:00 講師：依田徹（当館学芸課長）

会場：遠山記念館事務棟地下会議室 対面式（Zoom参加も可能） 定員：50名（先着）

参加費：500円（入館料別途） お申込み方法：当館公式サイト申込みコーナーから

コレクション展 1

5月23日(土)～9月6日(日)

遠山記念館で所蔵する六曲一双の優品である呉春「海辺山水図」と今尾景年「群鶏図」を、前後期の入れ替えて展示します。この他、遠山記念館の幅広いコレクションの中から、「青磁牡丹唐草文酒海壺」などの陶磁器の優品や、夏にふさわしい絵画作品を選んで展示いたします。



呉春「海辺山水図」右隻
江戸時代中期～後期 18～19世紀



「青磁牡丹唐草文酒海壺」龍泉窯(中国)
元時代初期(蓋は元末～明時代)
13～14世紀

テーマ展 「舞いの造型

9月19日(土)～11月15日(日)

— 英一蝶「布晒舞図」と安田鞞彦「風神雷神図」 —

舞踊は、人類最古の芸術とされています。日本においては、古くは神への奉納を目的とした「神楽舞」や雅楽の伴奏に合わせて舞う「舞楽」があり、庶民にとっては「念仏踊り」や「盆踊り」などが日常生活の中に溶け込んでいました。舞踊は、身分を問わず誰でも身一つで表現できるものであり、人々が舞い踊る姿は、しばしば絵画や彫刻などで表されてきました。

本展は、遠山記念館コレクションの中に見られる日本の“舞い”の造型をテーマとした展覧会です。特に、当館でも屈指の人気を誇る英一蝶(1652～1724)の「布晒舞図」と安田鞞彦(1884～1978)の「風神雷神図」を中心に紹介します。そのほか、長谷川栄作(1890～1944)の彫刻作品「太平楽」「春庭華」などを展示します。



英一蝶「布晒舞図」江戸時代 17～18世紀 一幅 重要文化財



安田鞞彦「風神雷神図」二曲一双 昭和4年(1929)



●遠山家端午の節句飾り

4月22日(水)～5月10日(日)

遠山元一が長男一行(大正11年まれ)の初節句の祝いとして揃えた、端午の節句飾りです。毎年、雛壇飾りと同様、旧遠山邸の中棟大広間の次の間に飾られます。その中には、人間国宝の二代平田郷陽や京都の大木平蔵など名工の作品も含まれ、甲冑飾りに、上段から鍾馗、神武天皇、日本武尊、応神天皇、源為朝、加藤清正など勇猛な姿の人形や飾り馬、また金太郎など愛らしい人形が並びます。



遠山邸2階 春の公開日

日時：4月25日(土)

5月9日(土)

午前11:00～午後3:00

参加費：無料(入館料別途)



●ご来館のみなさまへ●

感染症拡大防止のため、以下の点にご協力をお願いいたします。

- ・倦怠感、発熱、咳などの症状のある方は、ご来館をお控えください。
- ・アルコール消毒にご協力をお願いします。
- ・館内では、会話を控えめにし、周囲の方と距離を保ってください。
- ・作品、展示ケース、壁や柱などにはお手を触れないでください。

利用案内

◇入館料

	一般	学生
特別展	1,000円	800円
通常	800円	600円
展示替え期間	600円	400円

※中学生以下は無料、団体20名以上は2割引き

◇開館 午前10:00～午後4:30(入館は午後4:00まで)

◇休館日 月曜日(月曜が祝日の場合は翌日)
及び4月21日(火)、5月7日(木)、5月12日(火)
9月24日(木)

◇展示替え期間(邸宅、庭園のみ公開)

5月13日(水)～5月22日(金)、7月22日(水)

9月8日(火)～9月18日(金)

◇詳しい展覧会情報は下記をご覧ください。

URL <https://www.e-kinenkan.com>



電車・バスでのご来館の場合

- 東武東上線・JR埼京線 川越駅
 - 西武新宿線 本川越駅 ●JR高崎線 桶川駅
- いずれも「川越駅-桶川駅」間の東武バスで牛ヶ谷戸下車、徒歩15分

お車でのご来館の場合

- 圏央道川島ICより7分
- 川越方面から国道254号線の宮元町交差点を川島方面へ右折、釘無橋を渡り最初の信号を左折、案内板に従って約10分

遠山記念館だより 第70号 2026年3月発行

編集発行 公益財団法人 遠山記念館
編集担当 柳澤恵理子

〒350-0128 埼玉県比企郡川島町白井沼675
TEL: 049-297-0007 FAX: 049-297-6951